

誰かが誰かに寄り添って 誰かが誰かに寄り添って

3年目の夏を迎えた被災地からメッセージが届いている。「弱い人にしわ寄せがきている。生き残った人に、次の困難を背負わせ、命を落とす人が出ないように被災者に向き合っていて欲しい。」と。

「震災関連死」悲しい「ことば」です。あの日の悲しみだけでも背負いきれない被災者が、
あの日…命拾いした…「命」を亡くす日々が続いています。

「絆」優しい「ことば」です。あの日の絶望を希望に変える力を、復興が進まぬ今、避難が長期化する今、求められています。

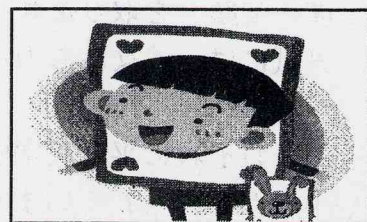
「忘却」辛い「ことば」です。あの日から2年4ヶ月。被災者が恐れることは「忘れ去られること」だと言っています。

「震災三十一文字」から被災地に思いを寄せてみませんか？

「家なき子」笑って話す友人に かけることばが 見つかりません
胸に住む*PTSDを退治する 笑い 音楽 ひとり泣く *心の傷
生きねばと 仮設のそばの荒地地借り 記憶めぐりて 野菜種まく

いかががお過ごしですか

実行委員会は夏から秋にかけて、「お便り支援」を行います。
そうです！支援物資を受け取って頂いた方々へ、
かわいい絵手紙を送ろうと考えています。



あなたも、あなたの応援メッセージを一言添えて送りませんか。



被災地へ夏のプレゼント

希望をイメージした四つ葉のクローバーを描いた
Tシャツになりました。

<裏面はリレートークです>

リレートーク

「ありがとう」あなたたちへ

保護者会 会長 木村厚実

平安女学院の生徒たちによる東日本大震災被災地応援実行委員会活動イベントに保護者会として協力をさせてもらいながら、私たちは非常にたくさんのごこと、特に「ありがとうの意味」を学ばせてもらっています。2011年3月、震災直後から生徒たちは「自分たちにできること」を求めて、震災復興応援のための実行委員会を立ち上げました。保護者会も遠巻きに子供たちの活動を見ながら、できることがあれば手伝いたいと感じておりました。最初は、彼女たちも「何ができるか」を考えている余裕もなく、大津波に家や畑を飲み込まれて避難生活を余儀なくされている皆さんにどのように接したらいいのか、まず、そのことに直面したようです。

最初に取り組んだのは「ふとん」でした。被災地の皆さんが避難生活で困っていることを直接ヒアリングしながら支援の方法を考えていました。お金があっても使えない、でも、いま欲しいのは春まだ寒い体育館の床からくる底冷えを凌ぐための「ふとん」なのだ、ということを目にして、彼女たちは動きました。保護者会もその活動に心を動かされ、バザーの収益金を出して子供たちの布団集めに協力しました。そうして、子供たちは被災地の皆さんと常に連絡を取り合いながら、現在ではこころのケアにまで取り組んでいます。被災された方々の気持ちを少しでも「癒してあげる」方法はないのか、彼女たちは苦悶した結果、自分たちの演奏やコーラスの歌声をCDにして届けてあげることにたどり着きました。さらには、皆さんがもう一度「笑顔」を取り戻せるようにと、カメラとアルバムを送ります。このアルバムの表紙には、彼女たちの「笑顔」を写したたくさんの写真がコラージュされていました。

そのそれぞれの平安女学院からの支援に対して、被災地の多くの方々から感謝の声や手紙が届けられています。これらの「ありがとう」には、人として生きる慈愛の精神に対するお礼の気持ちが滲んでいて、読む者のこころの琴線に触れて感動を与えます。

「家族やすべての財産を失い、路頭に迷っている人を見たとき、あなたは救いの手を差し伸べてあげられますか？」この究極の問題に立ち向かい、彼女たちは精一杯努力をして、慈愛のこころを掴み取ったのです。彼女たちの努力や成果は、それこそ平安女学院の教育のなせる業であり、何ら褒賞や賛辞を求めるものではありません。だからこそ、その努力は美しく、尊いのです。

最後に、保護者会から彼女たちに、とびきりの「ありがとう」を贈りたいと思います。